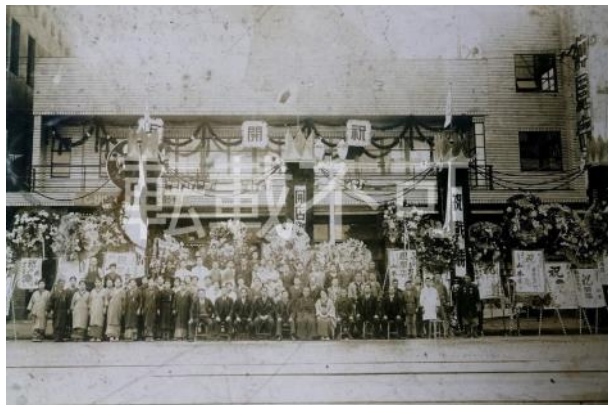




「三軒茶屋中央劇場」は外壁の河童のキャラクターも親しまれ、三軒茶屋映画劇場の姉妹館でもあった。（「港町キネマ通り」大屋尚浩氏提供）



世田谷で初の映画館「駒沢電気館」（後の三軒茶屋電気館、三軒茶屋映画劇場）昭和13年9月1日撮影（山本一雄氏提供）



仲見世百貨店の新装開店(昭和12年)
「世田谷区の100年」(いき出版)より



1907(明治四十)年の玉電開通時の様子を描いた石橋楼絵図
石橋楼は現在の世田谷通りと国道246の交差点の角にありました

下馬図書館 不定期企画 人と街と歴史を訪ねて 第1回 100年前、三茶に映画館がやってきた — 石橋楼(信楽)と三軒茶屋電気館

二〇二五年、世田谷で初の映画館が三軒茶屋の地にオープンして一〇〇年を迎えます。映画が「娯楽の王様」だった昭和の時代、三軒茶屋にはいくつもの映画館があり、「映画の町」としても賑わっていました。

終戦の年から一二年間を三軒茶屋で暮らした作家の山田風太郎は著書「戦中派焼け跡日記」(小学館)に身近な社会動向や当地のヤミ市の様子、鑑賞した映画等について記しています。

「各財閥が至るところに映画館を造り出す旨、紙上に報ぜられしが(中略)三軒茶屋でも世田谷郵便局の前にやはり映画館が建ちはじめた。」(昭和二年五月一日)

「三軒茶屋映画劇場に林長二郎田中絹代『お夏清十郎』を観にく。江口夜詩歌謡団なるもののアトラクションあり、田中は実に大女優也、場末の劇場の観衆一日比谷などの壮大なる劇場とは異なる愛すべき和やかなる雰囲気。」(昭和二年八月九日)

林長二郎・田中絹代主演の「お夏清十郎」は一九三六(昭和一一)年の松竹キネマの作品(キネマ旬報WEB参照)で、終戦直後は娯楽映画の製作が困難で、戦前のフィルムが上映されていたものと思われる。そして、江口夜詩とは一九四八(昭和二三)年の大ヒット曲「憧れのハワイ航路」や戦時歌謡「月月火水木金金」等で知られる作曲家で「大衆音楽の父」とも呼ばれます。一九三九(昭和一四)年、三軒茶屋の仲見世百貨店現在のエコー仲見世商店街の前身の二階に「国民音楽院」を設立しています(「石橋楼寛書」山本澤他著「三軒茶屋石橋楼」、「三軒茶屋文士町文化地図」きむらけん著「北沢川文化遺産保存の会」、「江口夜詩関係年譜」大垣市公式WEB参照)。詳細は不明ですが山田の記述から、この時に、三軒茶屋映画劇場では映画の上映に加え、江口夜詩の門下生によるコンサートが行われた事が分かります。同館では戦前には映画だけではなく、浪曲大会や世田谷警察署主催の衛生映画の上映会なども開催されており(「資料館だより」NO.75)二〇二三年三月 世田谷区立郷土資料館、終戦後も商業映画の上映にとどまらない活動を行っていたようです。

世田谷で初の映画館「駒沢電気館」

一九二五(大正一四)年、世田谷で初となる映画館「駒沢電気館」が駒沢村上馬引沢一五八(現在の三軒茶屋二丁目)に開館します。定員四六九名、無声映画の伴奏の為のピアノなども設えていました。開設主の山本善太郎は上馬引沢の旧家の出身でしたが、映画館に続き、一九二七(昭和二)年には先述の仲見世百貨店も開設しています。

駒沢電気館が開設される四年前の一九二二(大正一〇)年、次の文書が記されました。

「我レ独特ノ考ト母上始家族一同ハ元ヨリ(中略)山本新太郎氏、全善太郎氏ノ意見ヲ総合参酌テ茲ニ我ガ決心ヲ為ス(中略)」

十、(中略)活動写真館ヲ建設スル計画モアリ、然ル時ハ之ヲ臨時ニ公会場トモシ、又貸席トモスル都合ニシテ、村内発展に資スヲ得ベシ、

十一、右活動写真館ヲ設クルトキハ(中略)写真館入口近ク飲食店(シルコ、サイダー、氷水、菓子等)ヲ設クル計画モアリ(太字とルビは下馬図書館による)

これは「三軒の茶屋」の一つである石橋楼(元の信楽)※の経営者だった山本澤による「山本家改革次第書」(一九二二(大正一〇)年「石橋楼覚書」に掲載)です。澤は近代的な経営システムの導入を始めとする石橋楼の経営の変革を決意、親族や付き合いの深い近隣を招いての会議での結論をまとめたこの文書には映画館開設計画も含まれていました。

このようにして駒沢電気館が開設されたのと同様、澤は石橋楼を建て替え、喫茶部と玩具部による石橋屋商店に衣替えします。石橋屋商店はネオン看板、マホガニー材や良質の藤製に統一されたアルデコ風の内装など高級感があふれていたようです。

渋谷方面から大山街道(現二四六)を下った、三軒茶屋の分かれ道の角地にあった料亭旅館が舶来品に囲まれた高級商店へと近代化し、さらに映画館や百貨店が立ち並ぶなど、街が大きく様変わりしたものと想像されます。この頃の周辺の地図などを眺めてみると、表通りに沿って写真館やカフェ、電気屋等が立ち並び賑やかな街並みが伺える一方、表通りから一本道を入ると田畑も多く残るエリアでもありました。

※「三軒茶屋」の地名は、現在の三軒茶屋交差点の周辺に、信楽(後の石橋楼)・角屋・田中屋の三軒の茶屋があったことに由来します。また、善太郎と澤は同じ山本姓ですが、親族ではありません。

電気館と石橋楼のその後

一九三二(昭和七)年、世田谷区の発足により「駒沢村」から「世田谷区三軒茶屋」に地名が変わり、「駒沢電気館」は「三軒茶屋電気館」に名前を改めます。そして映画も活動弁士の唸りで楽しむ無声映画からトーキーへと時代は変化し、一九四二(昭和一七)年、改修工事と共に「三軒茶屋映画劇場」に改称。しかし戦況は悪化し、映画館経営二代目の精一は家族を疎開させ、自身は一人で劇場を守ります。そして、一九四五(昭和二〇)年五月二五日の山の手大空襲で三軒茶屋周辺は大きな被害を受けます。火の手が迫る中、精一はギリギリまで消火に努めますが、ついに劇場は焼け落ち、周辺は焼け野原となりました。終戦を挟んだ翌年七月、同じ場所に三軒茶屋映画劇場は再建され営業を再開、山田風太郎が訪れた八月初旬は再開の直後だったと分かります。さらに、姉妹館として世田谷中央劇場(後の三軒茶屋中央劇場、この周辺で初の鉄筋コンクリート造りの建物。また、壁面を飾った河童のキャラクターでも親しまれた)が一九五二(昭和二七)年に開業します。戦後復興と高度経済成長で映画の人気はさらに高まり、周囲に映画館が林立した黄金期を迎えます。しかし、テレビの普及や娯楽の多様化で映画の興隆は陰り、三軒茶屋映画劇場は一九九二(平成四)年に、三軒茶屋中央劇場は二〇一三(平成二五)年に閉館します。

一方の石橋屋商店は一九三六(昭和一一)年、区画整理の為に店舗を移転、一階は喫茶と洋食、二階は宴会場から成る「茶寮イシバシ」に改めます。しかし、太平洋戦争の戦況悪化に伴う建物強制疎開(道路に面した建物を取り壊し、道幅を拡げ、空襲による火災延焼を食い止めようとした)によつて店舗は失われ、「三軒の茶屋」の一つであった「石橋楼(信楽)」の歴史は幕を閉じます。※仲見世百貨店も同様に空襲対策の為に取り壊されています。

しかし、山本澤・善太郎の両氏が二〇〇年以上前に話し合った映画館や飲食店の運営を通じて「村内発展に資スヲ得ベシ」という公共性や地域の発展という目的は十二分に果たされ、今日の賑やかな三軒茶屋に受け継がれているのでは無いでしょうか。

映画館経営の三代目である山本一雄氏に伺ったお話と左記の資料を参考にしました

参考文献:「石橋楼覚書」「三軒茶屋石橋楼」二〇〇六年、「資料館だより」No.75「世田谷区立郷土資料館」二〇二二年三月、「ふるさと世田谷を語る」池尻三宿・太子堂・若林三軒茶屋「世田谷区」一九九四年、「STORY OF SANGENJAYA」世田谷区都市整備公社